

令和5年度第3学期始業式式辞

おはようございます。穎明館生の皆さん、あけましておめでとうございます。2024年、令和6年のスタートです。新年早々、令和6年能登半島地震が起きました。被災された方々に謹んでお見舞い申し上げたいと思います。災害の多い日本列島に住む者としてまったく他人事ではなく、心配で不安な気持ちは増すばかりです。被災地の落ち着きを願うとともに、私たちは日常を迎えられることへの感謝を忘れずに、一日一日を丁寧に過ごしたいものです。

さて、2学期終業式の式辞では日本について考えてみました。冬休みには、日本、日本人の心を意識して、伝統文化に目を向けてみましたか。そして今、太陽のエネルギーを得て、伝統と近代、不易流行をふまえた新たな決意で、新年、3学期を迎えていますか。

今日、今からでも構いません。今年目標や決意を固めてみてください。

ところで、皆さんは1月2日、3日の東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）をテレビで見ましたか。今やビッグ・スポーツ・イベントとして、お正月の風物詩にもなっています。私は高校時代、陸上部で長距離を専門としていたこともあり、毎年欠かさず視聴しています。

東京と箱根を往復する箱根駅伝は、1917（大正6）年、東京―京都間516kmを23区間に分け、3日間ぶつとおして走った襷リレー、「東海道駅伝徒歩競走」というものが原型だそうです。この成功に意を強くした、日本人初のオリンピック出場者である金栗四三氏が、大学や師範学校に参加を呼びかけて創設したのが、箱根駅伝ということになります。このことは、数年前にNHK大河ドラマの「いだてん～東京オリムピック噺」で取り上げられました。

箱根駅伝は、東京から箱根芦ノ湖畔までの片道約100km、往復200km以上を、それぞれ5人ずつ、合計10人で走り抜けます。第1回大会は1920（大正9）年、早稲田大学・慶應義塾大学・明治大学・東京高等師範学校（現・筑波大学）の4校が参加して行われました。今やこの箱根駅伝は、関東地区の大学陸上部の学生にとっては最高の舞台となっている伝統ある大会であり、日本の学生陸上競技を代表する大会になっています。

駅伝は日本発祥の陸上競技で、「ekiden」は国際語です。箱根駅伝の一区间約20kmはマラソンの42.195kmの半分、ハーフマラソンとほぼ同じ距離を走ることになります。しかし、マラソンと根本的に異なる点は、駅伝は個人競技ではなく団体競技であるということです。マラソンは自分との闘い、あくまで自己責任の世界です。一方、駅伝は襷を繋ぐことに大きな意味があります。体力・精神力に限界がきてもなかなか途中棄権は許されません。途中棄権は自分だけの問題ではなく、チーム全体に関わることなので、走者にとっての重圧は相当なものがあります。私も過去にも幾度となく、走っている最中の体の異変や故障で襷を繋げなかった場面を見てきました。見ているだけで、こちらも苦しくなるような場面です。

だからこそ、襷は駅伝のシンボルであり、箱根駅伝の場合、10 人がその誇りと汗の染み込んだ母校の襷を繋ぐ様が圧巻なのです。中継点で先頭走者から 20 分以上、遅れたチームは繰上げスタートとなり、襷を繋ぐことはできません。11 位以下の大学は、次年度また予選会からの熾烈な戦いが待っています。とかくスポーツの世界では勝ち負けの結果だけが話題になりますが、その過程、背景には言い尽くせない努力や血のにじむような練習があることを忘れてはならない。観客は結果に感動するとともに、実現までの努力や日々の頑張りに思いを巡らして、拍手を送るのだと思います。

ところで、第 100 回の記念大会である今回の箱根駅伝は、関東以外の大学も予選会からの出場が可能となり、本大会には例年より多い 23 大学が出場しました。最終的には、青山学院大学が、10 時間 41 分 25 秒で優勝しました。連覇を目指し前評判の高かった駒澤大学を圧倒した走りは、大変見ごたえがありました。10 位までのシード権争いも激しかった。繰上げスタートはありましたが、途中棄権で襷を繋ぐことのできない大学がなかったことには、ほっとしました。私の母校、早稲田大学は 7 位に入り、シード権を確保しましたが、また優勝争いをする日を期待したいものです。駅伝そしてスポーツは、母校やひいきのチームを応援できる場所も魅力の一つだと思います。今回の箱根路では、ともにコロナ禍を乗り越えて、旗を振り声援を送る沿道一杯に集まった大勢のファンの姿も印象的でした。

先ほど、私は高校時代、陸上部で長距離走を専門としていたと話しました。大学、箱根駅伝とはレベルは全然違いますが、自分の経験を少しだけ話します。当時の我々の部活動において、全国高校駅伝（全国大会は毎年 12 月に京都で行われていますね）の東京都予選会が一番の目標でした。個人としては部内の駅伝のメンバーに選出されること、そして部としての悲願は、東京都から 6 校選抜される関東大会に出場することでした。私が入部する 2 年前に 8 位に入賞したという話を聞いていたので、「我々の代では 6 位に入って関東に行くぞ」と意気揚々と、仲間意識も強く、練習にもよく励みました。私は平凡な記録の選手でしたが、先輩や同級生の励ましもあって、高校 1 年、2 年と 2 回、区間をまかされました。2 回とも襷を繋げることはできましたが、いずれも力及ばず、競っていた走者に抜かれて順位を下げたので、ただただ仲間に申し訳ない気持ちで一杯だったことを覚えています。関東大会出場も、残念ながら実現できませんでした。しばらくは落ち込んで、挫折感を味わっていました。私にとっては、青春の苦い思い出の一つです。それでもこの経験からか、頑張っているのに結果を出せない人、突然不調に陥って苦しんでいる人、弱っている人に心から応援できるようになったのかな、と思います。また、文武両道、両立、失敗経験も大事な経験、頑張るお互いを応援しあおう、支えてくれる人に感謝しよう等々、私が教師として

今まで伝えてきたメッセージの礎は、高校時代に培われたのかもしれませんが。

ところで、駅伝の世界を巧みに描いた小説としては、三浦しをんさんの『風が強く吹いている』があります。「俺たちは『強い』と称されることを誉にして、毎日走るんだ」——珠玉の言葉です。この小説を読むと、走ることが生きることと重なり合っただけで思えてきます。ぜひ読んで下さい。今年もたくさん読書をして、自分の世界を広げ、深めたいものですね。

さて、長い距離をひたむきに走る駅伝は、時に、人生そのものの縮図とさえいわれます。平坦な所ばかりではなく、箱根駅伝の5区のような起伏の激しい坂道もあります。その苦難を克服するためには、日頃からのたゆまぬ努力が必要です。自己との戦い、克己心が求められます。これはスポーツにも、勉強にも共通していることです。そして、人生という歩みにおいては、誰もが自分の中で、誇りという名の心の襷を繋いでいくものだとも思います。

穎明館生の皆さん、今日は第3学期のスタートです。皆さんも1学期、2学期、そして今日からの3学期へと、最高の頑張りで自分の心の襷を繋いで、3月に今年度のゴールテープを切ってください。今まで少々、出遅れている人も、挽回しようじゃありませんか。襷を繋ぐということは、支えてくれている人々の心を繋ぐことであり、過去・現在・未来を繋ぐことでもあります。今の自分から未来の自分へ、また、今の穎明館から未来の穎明館へ、心の襷をしっかりと繋いでいきたいものです。

6年生、37期生の皆さん、いよいよ受験本番が近づいてきました。「穎明館こそわが誇り」、皆さん一人ひとりに、誇りある心の襷があるはずです。頑張ってきた自分自身を信じて、合格・進路決定というゴールテープを切ってください。そしてその心の襷は、後輩の皆さんに必ずや受け継がれていくはずです。私は沿道で精一杯、心からの声援を送り続けます。

頑張れ穎明館生！ラストスパート 37期生！

最後にもう一つ、兄弟校の堀越高校サッカー部が全国高校サッカー選手権大会でベスト4進出を決め、決勝進出をかけて本日、国立競技場で試合が行われます。ベスト4進出は学校史上初のことであり、堀越学園100周年に花を添える形になりました。私はここにも、心の襷を繋いできた人たちの思いや絆を感じずにはられません。兄弟校として、心より健闘を祈りたいと思います。

さあ、我々穎明館も3学期、そして令和6年も、皆で心の襷を繋ぎ、着実な前進をしていきましょう。健康に留意し、充実した毎日を過ごすことを期待しています。

以上、令和5年度第3学期始業式式辞といたします。